

## 文学テキストにおける表象と時間序説

中野, 和典  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/8351>

---

出版情報：九大日文. 1, pp.178-188, 2002-07-25. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会  
バージョン：  
権利関係：



# 文学テキストにおける表象

## と時間序説

NAKANNO Kazunori  
中野 和典

### 序

「文学テキストにおける表象と時間」という問題設定自体は、特に新しいものとは言えない。例えばアリストテレスは『詩学』の中で、詩作を再現・模倣（ミイメーシス）であると概括し<sup>1)</sup>、その最も重要な対象が筋・出来事の組み立て（ミュートス）であると述べた<sup>2)</sup>。表象（representation）の問題のうちには、再現・模倣することの問題が含まれるだろうし、筋・出来事の組み立ての問題は、序列や持続などの視点から時間の問題として考えることができるだろう。

しかし、表象論、時間論は多角的な検討を経て、より豊かな問いを可能にするものになっているようである。もはや表象は、単に何かを再現・模倣すること以上の働きを持つものとしてとらえられているし、時間もアリストテレスが述べたような「運動の数」<sup>3)</sup>といった計量的な側面からだけ語られているのではない。両論の思考を援用しつつ、文学テキストを分析することによって明らか

かになることは、少なくないのではなからうか。

表象と時間とは、文学テキストを成立させる重要な要素である。それは、表象なしに人間は何ものをも認識することはできない、であるとか、時間がなければいかなるものも存在しえない、というような議論とは異なる次元でそうなのである。そもそも言語自体が表象と時間に支えられているし、いわゆる文学的な機能というものも表象と時間との特別な構成としてとらえることができようでもある。

本論では、まず、文学テキストについて考えるとき、表象と時間とをどのような概念として用いることが有効であるかを検討し（Ⅰ）、次に言語の時間性について考察した後（Ⅱ）、文学テキストにおける表象がいかなる時間性をもつのかを考え（Ⅲ）、最後に「文学テキストにおける表象と時間」という問題領域において今後追求すべき課題がどのようなものであるかを明らかにしたい。

### Ⅰ 時間の表象

「文学テキストにおける表象と時間」という問題を考えるにあたって、まず考えなければならぬことは、表象と時間とをどのような概念として用いるのか、ということである。と、いうのも、これら二つの概念は、多くの理論家によって考察が加えられており、多義的であるからだ。

まず、本論で述べる文学テキストにおける表象とは、人間がテキストに関わり合うときに構成される現前のことである。それは

テキスト以前に発生した事象（オリジナル）の模造（コピー）であることもあれば、現前を通じてはじめて立ち現れてくる何かであることもある。作者が文章を綴ることによって何かを現前させるという側面もあれば、読者がテキストからある像を構成するということも表象のうちに含まれる。表象と表出との異なる点は、それが、必ずしも「作者の内部にあるものを外部に表わす」とか、「主観的にとらえたものを客観的な媒体（文章）に形象化する」といったことに限られないことである。作者の意図に還元されない要素をも含む現前を考察の対象とするものとして、表象という概念を用いることとしたい。

次に、文学テキストにおける時間についてであるが、これは表象なしには成立しない。それは、文章そのものが自体的に時間を持つのではないからである。何者かがテキストに関わるとき、表象とともにテキストの時間は構成される。それは言語の、さらには物語の構造とも関わる問題であるが、それについて考える前には、時間が哲学の領域でどのように語られてきたかを検討することは有効だろう。それによって、時間について考える、というとき、その性質として特に何に注目するべきかということ、より分析的にとらえることができるだろう。その概念の大きさのために、時間について何かを指摘しても、それが非常に曖昧なものに留まってしまうようなことは極力避ける必要がある。断っておくが、ここで注目するのは、あくまで時間がどのように語られてきたか（時間の表象）であって、時間とは何かではない。

時間は心性とともにあるものとして語られてきた。アリストテレスは時間を「運動の数」であると述べたが、単に外的な事象ど

うしの関わりから時間をとらえていたのではない。

もし靈魂が存在しないとしたら、果たして時間は存在するのだろうか、しないのだろうか、これが疑問とされよう。なぜなら、数える者の存在することが不可能である場合には、数えられうるなものかの存在することも不可能であるからして、したがって明らかに、数もまた存在すること不可能であろうから。というのは、数はすでに数えられたものか、あるいは数えられうるものかであるから。ところで、もし靈魂または靈魂の「部分なる」理性をのぞいては、他のなものも、本性上数えることのできるものでないとすれば、靈魂が存在しない限り、時間の存在は不可能であろう、そしてただ時間の基体たるもの「運動」のみが「時間なしに」存在可能であろう、すなわちもし運動が靈魂なしにでも存在することができるとするればそうでもあろうように。だが、前と後は運動のうちにある。そしてこれら「前と後」が、数えられ得るものどもとしてのかぎり、時間なのである。<sup>44</sup>

運動は理性なしでも存在するが、時間はそうではないというアリストテレスの論は、時間がいわば心性においてのみ構成されることを指摘したものと見ることができ。 「時間＝運動」ではなく「時間＝運動の数」と言っていることには注意する必要がある。

このような時間を心性からとらえる見方は、アウグスティヌスにはより顕著である。

時間は延長以外のなものでもないようにわたしには思われるのであるが、しかしいったい、いかなるものの延長であるのかわたしは知らない。もしも時間が魂そのものの延長でな

いなら、それはおどろくべきことであろう。<sup>5</sup>

人間は「魂」において時間を測るのであり、過去・現在・未来という時間の様態は、それぞれ記憶・知覚・期待という心の状態であるとアウグスティヌスは言う。<sup>6</sup>ここでは、三つの時間の様態は、心性と密接に結びいたものとして語られている。

デカルトは持続という観点から、「運動の数」というアリストテレスの時間論とは異なる見方を示した。

例えば時間を一般的意味の持続から区別し、運動の数であるというとき、時間は単なる思惟様態〔様式〕であるにすぎない。何となれば、我々は決して運動のうちに、運動していないものの場合とは別の持続を理解するわけではないからである。二つの物体が一時間のあいだに、一つは速く他は遅く運動するとき、なるほど一方には遙かに多くの運動があるけれども、しかし我々はそのうちに他方におけるより多くの時間を、数えはしないことから明らかである。しかしながら、あらゆるものの持続を測るためには、我々はこれを、年や日の生ずるものになつていて最大で、最も平均した運動の持続と比較するので、この持続をば我々は時間と呼ぶのである。従つてこのことは一般的意味の持続に、思惟様態〔様式〕以外の何ものも付加するわけではない。<sup>7</sup>

時間とは「運動の数」ではなく、「運動の持続」であるとデカルトはいう。ここでいう持続とは人間が事物をとらえる様態（様式）である。時間は、運動の数の多寡によつて認識されるのではなく、測定の対象となる運動の持続と基準となる天体運動の持続との比較によつて認識されるのであり、そのような比較は思惟の働きに

よるのだという。

このような思惟の様式としての時間は、カントによつて、より分析的にとらえられている。

内的直観において本来の素材をなすものは、やはり外感の表象であり、これが我々の心意識を占めている、——しかしそればかりでなく、我々がこれらの表象を入れるところの時間が、すでに継起的存在の関係、同時的存在の関係、および継起的存在と共に同時的に存在するもの（常住不変なもの）の関係を含んでいるのである。そして時間そのものは、経験における表象の意識よりも前にあり、我々が表象を心意識に入れる仕方の形式的条件として、意識の根底に存するのである。<sup>8</sup>

時間は経験によつて確認できるといふより、むしろ経験に先立ち、経験を可能にする内的な条件であるとカントは言う。<sup>9</sup>人間の心性は外的な直観による表象に占められているが、それらの表象は、継起・同時・常住不変という時間性として関係づけられているとカントは指摘した。

ベルクソンは、時間を純粹持続であるといひ、それを空間の觀念が介入している持続とは区別した。

自由に関しては、その説明を要求するすべての問題は、それと気づかれることのないまま、「時間は空間によつて十全に表わされうるか」といふ問いに帰着する。——これに対して、私たちはこう答えよう。流れた時間が問題なのであれば、然り、である。流れつつある時間が話題になつていたのであれば、否、である。ところで、自由行為は流れた時間のなかではなく、流れる時間のなかでおこなわれるものである。した

がって、自由とは一つの事実であり、確認される諸事実のなかでも、これほど明瞭なものはない。この問題のもつすべての困難さは、また問題そのものも、持続に、拡がりの場合と同じ属性を見いだそうとしたり、継起を同時性によって解釈したり、自由の観念を明らかにそれを翻訳できない言語で表現しようとするところから生まれてくるのである。<sup>\*10</sup>

ベルクソンは、カントが時間を空間のような等質的環境とみなしていることを批判した<sup>\*11</sup>。そのような時間観は、反省的な意識によつてとらえられるイメージにすぎないのであり、時間そのものではないという。そのような空間性が介入したイメージを、生成しつつある時間に演繹することは、現在や未来の不確定性に目を覆うことであると、ベルクソンは指摘した。

フッサールは、現在という時間の様態が背景として過去性を含んでいることを指摘した。

現象学者は、例えば空間物の知覚の場合には（さしあたりここでは、意味を表すあらゆる述語は捨象して、純粋に延<sup>レイス・エクステンサ</sup>長<sup>サ</sup>物<sup>に留まるが</sup>）、さまざまに変化する「見える物」やその他の「感覚的な物」がいかにして、この同一の延<sup>レイス・エクステンサ</sup>長<sup>サ</sup>物<sup>の</sup>「さまざまな現出という性格をもつのか、を研究する。すなわち、それらの物それぞれについて、そのさまざまに変化するパースペクティヴを研究し、さらに、その時間的な与えられ方については、それらが過去把持的に沈み込みながらまだ意識されているという変化のあり方や、自我に関わる点では、注意の様態などを研究する。その際、次のことに気をつけなければならぬ。つまり、知覚されたものそのものの現象学

的解明は、知覚されたものを知覚の進行において知覚に即してその特徴にしたがって展開することと結びついていくわけではなく、それは、潜在的な知覚をありありと思ひ浮かべることによつて、思われたもの<sup>コギタートウム</sup>の意味のうちに含まれているものや、（背面のように）単に非直観的にもに思念されただけものを明らかにし、それによつて、見えないものを見えるようにすることだということ、これである。このことは、すべての志向的分析に当てはまる。<sup>\*13</sup>

潜在的な知覚に目を向けることによつて、知覚されたものに含まれるものを解明することができる。フッサールは言う。時間についていえば、現在の知覚には、潜在的に過去の知覚が含まれているということになる。

以上のように時間がどのように語られてきたかを見た結果から（むろん、これだけでは全く不十分に違いないが）、時間論において何が問題となるのかを整理すると次の三点のようになる。一・出来事の序列としての時間、二・出来事の持続としての時間、三・出来事の来歴としての時間である。これらを文学テキストに引きつけて考えるならば、それぞれから次ような問題を設定することができる。

一・表象の序列としての時間。文学テキストにおける時間の問題を、表象どうしの前後関係から考えたい。これは、単にテキストにおける表象の具体的な位置（前か後か）だけではなく、表象の対象が帯びている時間性との関係も見ることがある。表象の前後関係によつて、表象どうしが互いに前後の配置を持つことと、

さらに表象の対象が帯びている時間の様態（例えば書かれた事件の前後関係）との関係をも考えれば、文学テキストは、実に多層的で複雑な時間構造を持ちうることがわかる。

二．**表象の持続としての時間**。文学テキストにおける時間の問題を、表象を構成している媒体（文字）の量から考えたい。ある表象を構成する文字の量が、時間の視点から見て問題になるのは、文字の量を読むのに必要な時間の持続を予測する限りにおいてである。しかし、ここでは「…文字読むのに…秒を要する」ということを取り出して一般化することが重要なのではない。文学テキストにおいて、表象 a に費やされる文字の量と表象 b に費やされる文字の量との差異、あるいはそれぞれの表象の対象が帯びている時間的な持続（例えばある事件の時間的持続）と表象との関係が問題となるだろう。

三．**表象の来歴としての時間**。文学テキストにおける時間の問題を、表象に含まれる過去性から考えたい。これは、ひとつには文学テキストにおいて、反復や類似などによって関連づけられた表象の網状組織ネットワークがうながす想起を問題とし、ひとつには表象の対象に含まれる過去性（歴史）を問題とする。

以上のように、「文学テキストにおける表象と時間」という問題を設定するにあたって、表象を作者と読者の間にある現前の作用として、時間を表象の序列・持続・来歴という三つの構成として考えたい。このような整理が、文学テキストの機能を明らかにするのにどれだけ有効か、ということについては実際に文学テキストを分析しながら検討する必要があるだろう。

## II 言語の時間

言語が必然的にある時間性を含むものであることを指摘したのはフェルディナン・ド・ソシュールであった。ソシュールは言語の一般的な法則を記述するために、偶然的・特異的で継起的な諸辞項を対象とする通時言語学と、共存し体系をつくる諸辞項を対象とする共時言語学とを一端分別した。共時態としてとらえたときの言語には、もはや時間の問題が関わらないかのようにであるが、そうではない。

能記は、聴取的性質のものであるから、時間のなかにも展開し、その諸特質を時間に仰いでいる… a) それは拡がりを表わす、そして b) この拡がりはただ一つの次元において測定可能である…すなわち線である。<sup>\*14</sup>（傍線原文）

シニフィアン（能記）は、時間的な延長のうちのみ展開する。そして、このシニフィアンの時間的延長は、統合と連合という言葉の二側面の議論に展開される。

話線のなかで、語はそれらの連繋の力によって、かの二個の要素を一時に発音することをゆるさない・言語の線的特質（略）にもとづく関係を、それらのあいだに取りむすぶ。要素は言の連鎖の上に順ぐりに配列される。このような・支えとして拡がりをもつ結合は、これを統合（*syntagme*）と称することができる。統合はそれゆえつねに二個以上の接踵単位からなる（略）。統合内におかれるときは、辞項はそれに先行するもの、後続するもの、もしくはその双方と、対立することによってはじめて価値をえる。<sup>\*15</sup>

言語の統合軸は、時間的な延長のうちに構成される。一方、統合軸は、陰在的な記憶の系列として同時に構成されている（そのような意味では統合は空間的であると言えるだろう）。実際には統合が音や語の連鎖という〈支えとして拮据りを持つ結合〉であり、連合は同位配列の中から選り出された一辞項の他は〈空間中に現前していない要素〉ばかりなのだが、その性質として統合は時間的であり、連合は空間的である。

このように、共時言語学においても、能記と統合については時間的な延長がそれを支える不可欠の要素となっている。特に文章の連鎖レベルにおける統合は、個人の発話行為としてパロール（言）の領分とみなされる側面と、統辞論の視点からラング（言語）の領分とみなされる側面とがあるが、その区分には曖昧さを残している。それは共時態としてとらえる際にも言語から時間性を切り離せないためである、といえるだろう。

ソシユールによって一端分別された連合と統合という言語の二側面を交差させる思考によって、その詩的な作用を分析したのは、ロマン・ヤコブソンであった。ヤコブソンの用語によれば、連合と統合はそれぞれ選択（selection）と結合（combination）であるが、彼はソシユールが結合（統合）の線状的な時間性に目を奪われていたために、同時に発せられる音の可能性を見逃していることを指摘した。

結合の二つの変種——共起と連鎖——のうちで、このジュネーヴの言語学者が認知したのは、後者、すなわち時間的序列のほうだけであった。音素が共起的な弁別特性（elements

*differentiels des phonemes* 音素の示差的要素)のひとまとまりであるということ、彼自身が洞察していたにもかかわらず、二つの要素を同時に発音する可能性を排除する(略)言語の線状的性格を信じる伝統的な信仰に、この学者は屈服した。<sup>\*16</sup>

ヤコブソンは、結合が連鎖(継起的な序列)だけではなく、共起(同時的な弁別特性<sup>\*17</sup>の束)の働きによっても構成されていることに注目している。例えば、話し手/聞き手によって「fig いちじく」の代りに「pig ぶた」が選択される場合、話し手/聞き手は「f」と「p」という同時的で弁別可能な音の束(音素)のうちひとつを選択し、それに続く「i」と「g」もそれぞれが弁別される音の束(音素)になっている。音素とは単なる弁別可能な単一の音ではなく、弁別特性の束なのである。それゆえに音素は共起的なのであり、話し手/聞き手は二つの要素を同時に発音/聴取することが可能になる。このようにソシユールが線状的な序列として取り上げた統合の軸に、ヤコブソンは、共起という同時性の働きを見ることがによって言語機能の広がりをとらえようとした。結合(統合)関係が換喩(特に提喩)と密接なつながりを持つというヤコブソンの指摘も、統合の軸に展開された表象の蓄積を同時的に見ることを想定している点において、統合の軸に連合の軸を交差させる思考に拠っていたと言える。

また、ヤコブソンは言語の詩的機能について次のように述べている。

詩的機能の経験的な言語学的基準とは何か。特にいかなる詩的作品にも内在する不可欠の特性とは何であろうか。この問いに答えるには、まず言語行動に用いられる二つの基本的

な配列様式を思い起こさねばならない。すなわち選択  
sercion と結合 combination である。(略)選択は等価性、相  
似性と相異性、および類義性と反義性を基礎として行われ、  
他方結合すなわち序列の構成は隣接性に基礎を置く。詩的機  
能は等価の原理を選択の軸から結合の軸へ投影する。等価性  
は序列の構成手段へと昇格される。詩にあつては一つ一つの  
音節が同じ序列中の他のすべての音節と等価とされる。一つ  
の語強勢は他の語強勢と等価と見なされ、同様にして無強勢  
は他の無強勢に等しくなる。長音は長音どうし、短音は短音  
どうし互いに等しい。語境界どうしは等しく、語境界の不在  
どうしも等しい。統辞上の休止どうしは等しく、休止の不在  
どうしもまた互いに等しくなる。音節は詩脚上の単位に転換  
され、モーラも強勢もまた然りとなる。<sup>\*18</sup> (傍線原文)

音の等価単位の繰返しによつて韻律をもつた文が構成される。そ  
れが音として等価の選択(連合) 関係を結合(統合) 関係に反映  
させたものと見なすこの視点も、線状的な序列に同時性を投げか  
けたものである。

ヤコブソンが注目したのは主に韻律の構造であつたが、意味の  
観点から言語と時間との関係を分析する必要もあるだろう。この  
問題について、ロラン・バルトによるコノテーションの分析は示  
唆的である。

おそらく将来はコノテーションの言語学の時代だろう。なぜ  
なら社会は、人間の言語が社会に与える第一の体系から出発  
して、たえず第二の意味の体系を發展させていくからであり、

そしてこの努力は、あるときは公然と、あるときは陰然と続  
けられ、合理づけられて、真の意味での詩的人類学に非常に  
近づくのである。<sup>\*19</sup>

バルトはコノテーション(暗示の意味)の基本モデルを、第一の  
体系(デノテーション)としての能記と所記との結合によつて構  
成される第二の体系の能記(コノテーター)と、第二の体系の所  
記との結合としてとらえた。<sup>\*20</sup> コノテーションの構成には能記と  
所記を結びつける第一の体系には属さないような関係づけ(意味  
作用)が必要であるが、それを支えるのは時間である。例えば、  
芥川龍之介「羅生門」において「面炮」がコノテーション機能を  
持つとすれば、それは作品の冒頭から繰返される「面炮」の表象  
によつて構成されるものであり、ただ一回の記述によるものでは  
ない。確かに、一回だけ現れる表象でも、それが文学テクストに  
おいて特別な意味を構成する場合もある。そのときにはその表象  
の対象自体がコノテーションを持つていることが考えられるが、  
それもやはり、時間的な延長における表象の蓄積によつて構成さ  
れている。たとえば、「バラ」愛」というようなコノテーション  
は慣習に根拠を持つものとして説明することができるだろう。能  
記「バラ」が植物のバラの概念以外の所記「愛」と結合するのは、  
愛の表現としてバラを人に贈るといふ行為が反復され人々の記憶  
に蓄積されているからである。このように、コノテーションを支  
えるのは時間性であり、さらに言えば物語である。

これを言語の連合軸と統合軸に関連づけて考えれば、コノテー  
ションには統合軸の展開が不可欠であるといふことになる。統合  
軸に序列化された語や文の類似や差異の反復によつて、コノテー



シヨンは成立する。

以上のように、言語は能記、統合軸として時間性を持つものであり、その時間構造の分析は韻律としての詩的機能やコノテーションの意味作用を理解するのに有効な視点になり得るだろう。

### III 表象の時間

文学テクストにおける時間と言っても、文章そのものが自体的に時間をもつのではないことは先に述べた。文学テクストにおける時間が問題になるのは、文章（能記）の指示対象（所記）がもっている時間性に注目するときか、文章の構造がもつ機能的な時間性に注目するときである。この問題についてロラン・バルトは次のように述べている。

言語ランゲにおける時間が、体系の形でしか存在しないのとまったく同様、時間性とは物語（ディスクール）の構造的クラスにすぎない、と言えよう。物語の観点から見れば、われわれが時間と呼ぶものは存在しない。あるいは少なくとも、ある記号学的体系の要素として、機能的にしか存在しない。時間は、固有の意味でのディスクールには属さず、指示対象に属するのである。物語と言語ランゲは、記号学的な時間しか知らない。プロップの注釈が示すように、《真の》時間とは、指向对象的、《現実主義的》錯覚なのである。構造的記述は時間をまさにこのようなものとして扱わなければならない。<sup>\*21</sup>

文章は自体的に時間を持たない。ただし、テクストの記号学的な時間（表象の諸関係によって構成される時間性）を分析の対象とす

ることはできる。テクストの記号学的な時間とは、読む行為によつてはじめて現実の時間となる、潜在的な、機能としての時間性である。バルトが指摘するこのような時間性に注目したジュラー・ジュネットは次のように述べている。

物語のテクストは、他のすべてのテクストと同様、それ自身の読みから換喩的に借用してきた時間性以外の時間性は持たないのである。（略）この種の換喩的転位の結果に関しては、なるほど折りに触れて修正することがあるいは少なくとも、修正しようとする必要とならう。しかしながら、われわれとしてはかかる換喩的転位をまずは引き受けてかか  
らなければならぬのである。ただし、これこそは物語作用ジユ・ナラテイフの一部をなしているからだ。そして、それだからこそ、物語、  
言説の時間（*Erzählzeit*）という準虚構を、そのまま受け容れ  
なければならぬのである。この偽りの時間は、真の時間と同様の価値を有しているのだから、われわれはこれを、そういう呼び方が同時に含むところの留保と同意とをもって、一つの疑似時間として扱うつもりである。<sup>\*22</sup>

物語言説の時間を厳密に計量化することは不可能だが、あえてそれを措定し、物語内容の時間との関係を分析することによつて、ジュネットは物語の構造分析を行った。すなわち後説法・先説法・空時法といった順序、休止法・情景法・要約法・省略法といった持続、単起法・反復法・活復法といった頻度の観点による構造の分析である。

このような記号学的な時間の分析は、読書行為における時間の問題を考えるとき、より充実したものとなる。ヴォルフガング・

イーターは、読書行為における時間を次のように分析した。

読書過程はそこに一種の時間軸があることを明らかにするが、その特徴は、表象行為によって生み出される想像上の対象が、次々に連鎖的な前後関係をとる点に示されている。さまざまな想像上の対象は互いに対立的であったり、異質であったりするが、そのすべてはこの時間軸に沿って現われてくる。だがこのような〈結びつき〉は、異質なもの同士の調和を生み出す保証とはならない。ただ逆に、相互の照応がなされることから、個々の対象に固有な性格は明確に認められる。それどころか時間軸に並び立つことによって、相違がきわ立つ。だが、われわれがそのようにきわ立つた相違を見て行くうちに、個々のイメージはその自足性の限界に達し、相違は過程の一面にすぎず、その反面では相互連関を保っていることに気づく。すなわち、時間軸の作用は、想像上の対象相互の相違をきわ立たせることによって、そこからなんらかの結びつきを生み出すようにしている。<sup>\*23</sup>

統合軸に展開する想像上の対象が、前後との差異から、独特の像の形成を讀者にうがなす。そこに新たなコノテーションが成立する。時間軸に展開する表象が、相互に関係を結ぶということが読書行為における時間のはたらきにほかならない。それはイーターが注目するイメージの異質・相違・対立にかぎらず、類似による表象どうしの結びつきにも同様の作用がある。ミシエル・フーコーは次のように指摘する。

表象の中に、過去の印象をふたたび現前させる晦冥な力がひそんでいなければ、いかなる印象も先行するある印象に似

たものとして、もしくは似ていないものとして、あらわれることはないであろう。この想起する力は、すくなくとも、一方は現在のものであり他方はおそらく久しい以前に実在することをやめた二つの印象を、ほぼ似通ったものとして（隣接的で同時的なものとして）出現させる可能性を含蓄している。<sup>\*24</sup>

想像力なしには、物同士のあいだに類似はないはずなのだ。

時間軸に展開される表象（とそのイメージ）は、読者の脳中に蓄積されてゆき、その差異と類似性によって関係づけられる。それがテキストを読むという行為の内実である。

以上のように、表象と時間は文学テキストの特別な韻律や意味を構成する要素になっている。最後に、「文学テキストにおける表象と時間」という問題領域において今後の課題とするべきことについて述べたい。まず、実際に文学テキストの表象と時間の構造を分析し、表象論・時間論を更新してゆく必要があるだろう。特に表象の序列・持続・来歴という点については、実際のテキスト分析を行って、その有効性を検討する必要がある。また、近代日本という場に目を向けるならば、時間論（特に西洋哲学や科学）の受容やその後の展開、時間計測の技術の進歩、社会的な制度の変革と時間観との関係をとらえる必要があるだろう。時間観の変化にともなう人間関係の変化、そこに含まれる問題と近代文学との関係の追求、残された課題は多い。

注

\*1 アリストテレス『詩学』（松本仁助、他訳 一九九七年一月 岩

波書店）二二頁。「叙事詩と悲劇の詩作、それに喜劇とデーイテュラムボスの詩作、アウロス笛とキタラー琴の音楽の大部分、これらすべては、まとめて再現といえる。」

\*2 アリストテレス『詩学』（前掲書）三六頁。「行為の再現とは、筋（ミュートス）のことである。すなわち、ここでわたしが筋というのは、出来事の組みたてのことである。（略）これら六つの要素のうち、もつとも重要なものは出来事の組みたてである。

なぜなら、悲劇は人間の再現ではなく、行為と人生の再現だからである。幸福も不幸も、行為に基づくものである。そして（人生の）目的は、なんらかの行為であって、性質ではない。人々は、たしかに性格によってその性質が決定されるが、幸福であるかその反対であるかは、行為によって決定される。それゆえ、（劇のなかの）人物は性格を再現するために行為するのではなく、行為を再現するために性格もあわせて取り入れる。したがって、出来事、すなわち筋は、悲劇の目的であり、目的はなにもものにもまして重要である。」

\*3 アリストテレス『自然学』（出隆、他訳 一九六八年七月 岩波書店）一七〇頁。「われわれが「今」を、運動における前のと後のととしてでもなく、あるいは同じ今だが前の今の或る「終わりの」部分と後の今の或る「初めの」部分としてでもなしに、一つのものとして知覚する場合には、そこにはなんらの「意識上の」運動もないわけだから、なんらの時間も経過したとは思われない。これに反して、前と後を知覚する場合には、われわれはそこに時間

があると言う。というのは、時間とはまさにこれ、すなわち、前と後に関しての運動の数であるから。」

\*4 アリストテレス『自然学』（前掲書）一八六頁。

\*5 アウグステイヌス『告白』（服部英次郎訳 一九七六年一月 岩波書店）下巻一三三頁。

\*6 アウグステイヌス『告白』（前掲書）下巻一三三頁。「未来も過去も存在せず、また三つの時間すなわち、過去、現在、未来が存在するということもまた正しくない。それよりはむしろ、三つの時間、すなわち過去のものの現在、現在のものの現在、未来のものの現在が存在するというほうがおそらく正しいであろう。じつさい、これらのものは心のうちにいわば三つのものとして存在し、心以外にわたしはそれらのものを認めないのである。すなわち過去のものの現在は記憶であり、現在のものの現在は直覚であり、未来のものは期待である。」

\*7 デカルト『哲学原理』（桂寿一訳 一九六四年四月 岩波書店）七四頁。

\*8 カント『純粹理性批判』（篠田英雄訳 一九六一年八月 岩波書店）上巻・一一五頁。

\*9 カント『純粹理性批判』（前掲書）上巻・一〇一頁。「時間は、一切の現象一般のア・プリオリな形式的条件である。一切の外的直観の純粹形式であるところの空間は、ア・プリオリな条件として、外的現象にのみ限定される。これに反して一切の表象は—外的な物を対象とするにせよまたそうではないにせよ、—それ自体、心意識の規定として内的状態に属する、ところがこの内的状態は、内的直観の形式的条件に従い、それだからまた時間に従っている。

このようなわけで時間は、一切の現象一般のA・プリアリな条件である、しかも内的（我々の心の）現象の直接の条件であり、またこれによって間接的に外的現象の条件でもある。」

\*10 ベルクソン『時間と自由』（中村文郎訳 二〇〇一年五月 岩波書店）二六三頁。

\*11 例えば、次のような箇所をあげることができるだろう。「時間について言えば、我々が一本の直線（これで時間を外的形象で表わす役目をさせる）を引きながら、多様なものを綜合する行為―換言すれば、それによって内感を継時的に規定する行為や、またこうして内感におけるかかる規定の持続に注意を払うことによつてのみ、初めて時間を考えることができるのである。」カント『純粹理性批判』（前掲書）上・一九六頁。

\*12 ベルクソン『時間と自由』（前掲書）二七六頁。「カントの誤謬は時間を等質的環境とみなしたことであつた。彼は現実の持続が相互に内的な諸瞬間から構成されること、それがまったく等質的な形式をとるときは、空間として表わされているのだということに気づかなかつたように見える。こうして彼が空間と時間とのあいだに立てる区別そのものは、結局、時間と空間との、自我の記号の表現と自我それ自身との混同に帰着する。」

\*13 フツサール『デカルト的省察』（浜渦辰二訳 二〇〇一年二月 岩波書店）九三頁。

\*14 フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義』（小林英夫訳 一九七二年一二月 岩波書店）一〇一頁。句読点は縦書きの書式にあらためた。

\*15 フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義』（前掲書）

一七二頁。

\*16 ロマン・ヤコブソン『一般言語学』（川本茂雄、他訳 一九七三年三月 みすず書房）二六頁。句読点は縦書きの書式にあらためた。

\*17 ロマン・ヤコブソン『一般言語学』（前掲書）八〇頁。「言語分析は複合的発話単位を固有の意味を担った究極の構成要素である形態素に分割し、さらにこの意味を担う最小の媒介体、形態素を差別するのに役立つ究極の構成要素に解体する。この構成要素を、弁別特性 *distinctive feature* という。」

\*18 ロマン・ヤコブソン『一般言語学』（前掲書）一九四頁。

\*19 \*20 ロラン・バルト「記号学の原理」（沢村昂一訳、『零度のエクリチュール』（一九七一年七月 みすず書房）収録）一九七頁。

ロラン・バルト

Sa (能記)	Se (所記)
Sa	

ロラン・バルト「記号学の原理」（前掲書）一九七頁。

\*21 ロラン・バルト『物語の構造分析』（花輪光訳 一九七九年一月 みすず書房）二三頁。

\*22 ジュラール・ジュネット『物語のディスクール』（花輪光、他訳 一九八五年九月 水声社）二八頁。

\*23 ヴォルフガング・イーザー『行為としての読書』（嚮田収訳 一九八二年三月 岩波書店）二五八頁。

\*24 ミシェル・フーコー『言葉と物』（渡辺一民、他訳 一九七四年六月五日 新潮社）